アメリカへ行った僚子

加藤恭子

アメリカへ行った僚子

加藤恭子

朝日新聞社

加藤恭子（かとう・きょうこ）

1929年，東京生まれ。1953年早稲田大学仏文科卒業と同時に渡米留学。1957年，ワシントン大学よりマスター・オブ・アーツ（修士号）を受く。同大学院博士課程に進学。1959年，フランスのナンシイ大学に留学。1960年，ディプロム・デチュード・シュペリュールを受く。再渡米，ジョンス・ホプキンス大学院で勉学。1961年，帰国。1965年，早稲田大学大学院博士課程を終了。同年再渡米，マサチューセッツ大学オノラリイ・フェロー。1972年帰国。現在上智大学講師。

著書『青春に悔いなし』（三一書房），『愛する僚子へ』（中央公論社），『ヨーロッパの青春』（中央公論社），『消された大酋長』（朝日新聞社）ほか，日，仏，英語によるフランス中世文学関係の学術論文。

アメリカへ行った僚子

定　価　820 円

発行日　昭和50年２月25日第１刷

　　昭和50年４月５日第２刷

著　者　加藤恭子

発行者　朝日新聞社　角田秀雄

印刷所　共同印刷株式会社

発行所　朝日新聞社　東京・名古屋 大阪・北九州

©加藤恭子　1975

0095-254278-0042

目

次

エイチャンがいない　7
ピンクのお部屋　23
アキラクンとディヴ　43
「オアソビ」事始　55
怪獣（シメール）の詩　67
マザー・グース　83
幼稚園　113
四人の暴れん坊　140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おこづかいかせぎ 162
ママも「オベンキョウした」 183
ライオンのおやこ 196
くいちがい 210
ハローウィーン 226
雪の足痕 247
あとがき 267

AD　多田　進
イラストレーション　落田洋子

アメリカへ行った倅子

エイチャンがいない

「ママ、ヘンなおんなのこがいるヨ！　キイロイかみのけヨ！」

伊勢丹の子供服売場でセーターを選んでいた主人の母と私の背後で、僚子が不意に大きな声をあげた。

「しッ！　そんなことを言うもんじゃないの！」

あわてて振りむいたひょうしに、七、八歳の金髪の女児を連れた外人夫婦の姿が眼にとび込んできた。あ、あの女の子のことか、と驚いた。ブロンドを「金髪」と訳すくせがついていた私は、あれが〝黄色い髪〟とは知らなかった。

それにしても、僚子は今までにブロンドの外人を見たことがなかったのだろうかと訝しく思った。アメリカ合衆国ボルティモア市で生まれたが、生後三ヵ月で日本へ帰ってきた彼女にとって、アメリカ時代の記憶があるはずはない。しかし、日本へ帰ってからも私たちには外国人の友人が多かったし、三歳になる今日まで、僚子は特別な意識なしに接してきたはずだった。でも、確かにブロンドは一人

もいない。

買物が終わってから、地下の食堂に寄った。席をきめてから気づくと、僚子がいない。

「あ、あそこに」

と主人の母が指さした。店内の奥まった一隅のテーブルの前に彼女は立っていた。あの外人一家がすわっていたのだ。夫人は微笑しながら何か話しかけたが、僚子はだまったまま真剣な表情で女の子の「黄色い髪」をみつめている。女の子は当惑と反感を顕にしながら、僚子を見返していた。

つかつかと近寄った私は僚子の腕を掴んだ。

「すみません。きっと友だちになりたかったのでしょう」

と弁解した。

「子どもはすぐに友だちをつくりますからね」

アメリカ南部訛りの強い英語で夫人はにこやかに答えてくれたが、女の子は固い表情のまま僚子を睨んでいた。

テーブルへもどってから、叱った。

「よその方のテーブルの前に立っているものじゃありません。それに、ちょっと変わった人がいるからって、ジロジロ見るのはとても失礼なことよ」

僚子は困ったような顔になったが、すぐに勢いよく言い返した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「だってママ、あんまりヘンなかみのけなんだモン」
ある怖れがちらと脳裡をかすめ、私は黙ってしまった。
それから二、三日しても、僚子はまだブロンドの女の子のことを考えているらしかった。
「ママ、キイロよりクロのほうがきれいだものネ?」
ある夕方、大学の研究室から帰った私に向かって、彼女は不意に聞いた。
「何のこと?」
「カミノケよ」
「あのね、僚子」
と私は娘の眼をのぞきこんだ。
「黒のほうが黄色よりもきれいだとか、黄色のほうが黒よりきれいだということはないわ。黒い髪の毛の女の子はそのままでかわいいし、黄色い髪の毛の子もそのままでかわいいわ」
「じゃ、オンナジじゃない……」
僚子は不満そうに言った。
全然別のことを、私は考えつづけていた。来年、私たちは日本を去って、アメリカに永住することになっていた。主人はマサチューセッツ大学の動物学科の助教授として、私も同じ大学のオノラリイ・フェロー(特別研究員)として、フランス中世文学の研究をつづけることになっていた。

そのとき、太平洋の向こう側では、ブロンドやブルネットの女の子たちが母親に言わないだろうか？　変な髪の毛の女の子よ……ママ、ブラックよ……と。

昭和四十年の年があけると、渡米準備をそろそろ始めなければならなかった。昭和二十八年から三十六年までの八年間を留学生としてすごした私たちにとっては、二度目の渡米であった。三十六年に帰国してからの四年間、主人は名古屋大学の助手、そして助教授としてすごし、母校の早稲田大学の大学院へもどった私のほうは、仏文科の博士課程を終了したところだった。二人の研究生活にとってはアメリカが理想的、そう信じていた私たちは、マサチューセッツ大学からの招聘をきっかけに、永住を決意したのだった。

出発は十一月二日ときまった。大阪三井商船の「あるぜんちな丸」でロスアンゼルスへ、そこからコネティカット州のハートフォードまでは飛行機を利用することになった。

第二の故郷ともいうべきアメリカに住むことに、主人と私は何の不安もなかった。しかし、三ヵ月でアメリカを去った僚子にとっては、日本と日本語だけが唯一の世界であった。多少の危惧がないわけではなかった。だが、すべてはうまくゆく、と信じ込もうとした。

僚子は英語を知らない。しかし、それがハンディキャップになるなどということがあり得るだろうか？　日本語だってろくにしゃべれない三、四歳の幼児に、どの言葉の中にほうり出されようとも、

特別な困難などというものがあるとは思えない。

それに、子どもは早い、と誰でも言うではないか。商社の駐在員や大学の研究員として子ども連れで海外に滞在した人たちは、子どもたちの新しい環境への順応がいかに早く容易であるかを聞かせてくれる。親にはとうてい真似のできないようなあちら式のアクセントまで、すっと身につけてしまうんですものね。子どもの発音といったら、土地の人と同じです。子どもの世界には、国籍を超えた〝共通語〟がありますものね。そうした経験談のすべてを私は信じた。

それに、性格の点でも娘は外国生活に適しているようにみえた。当たり前の人間として外国人をみてきた。すっと膝へのりにいったり、相手に日本語が通じなくても、

「オバチャマのピン、なあに？　ウサギ？　イヌ？」

などと話しかける。アメリカ人の友人のほうがあわてて、乏しい日本語の知識のありったけを動員して、娘の言っていることを理解しようとする。

「ウサギのミミはながいじゃないノ。これ、ミジカイよ」

何を言われているのかわからないまま、友人は、イエス？　イエス？　と膝のうえの娘の肩をなでたりしている。

その調子でやればいいのだ。向こうへ行っても、英語ができるようになるまでは日本語を使えばいい。自然な人なつっこさが、彼女の前に道をひらくに違いない。

娘が「青山のおばあちゃま」と呼んでいる実家の母などは、はっきりしゃべりさえすれば、外国人でも日本語がわかると信じ込んでいるふしがある。東京を訪れたついでに、母から午後のお茶に招待された私の旧師のひとりは、台付きの茶托で出された茶碗を右手の人差し指と親指でつまみ上げようとして、母に一喝された。「あなたさま、それはいけません！」日本語がわからなくとも、叱責は感じる。旧師が大きな体軀をちぢこませて恐縮していると、母は凛と言う。「こうなさいませ。わたくしのする通りになさるのです」何がどう悪くて叱られたのか皆目わからずにあわてていた異国からの客人はほっとして、母の一挙一動を見逃すまいと眼をこらし、不器用な手つきで懸命にまねをする。母のゆっくりとした日本語での説明はたえまなくつづき、茶の湯の歴史に寄り道したりする。

こういう調子で、私の外国からの友人たちはどれだけ「青山のおばあちゃま」に叱られたかわからない。しかし、彼らの多くは母との邂逅（かいこう）を喜び、〝日本の文化や言語を勉強せずに日本へきてしまった〟ことを詫び、なかには帰国してから日本語の勉強をはじめた人もいる。

私自身にしても、言葉のわからない国へ旅行しても、簡単なコミュニケーションに苦労したことはなかった。祖母に出来、母に出来たことを娘がやれないはずはない。

たった一つの心配は、お手伝いの栄ちゃんと別れることであった。栃木の高校を卒業してから、僚子が一歳半のときに働きにきてくれた栄ちゃんは、物ごとを明るいほうへ解釈する素直な娘だった。「上京する前、赤ちゃんの世話ってどうしたらいいんだろ、ってお母さんに聞いたら、かわいがって

かわいがってあげな。そうすりゃいい子になるよ、って言いました」

と告げたことがあったが、栄ちゃんはお母さんの言いつけ通りにした。僚子をかわいがってかわいがってくれた。うるさく騒ぎ回っている僚子がやっと昼寝したと思うと、栄ちゃんにはそれがものたらないらしかった。「奥さまァ、僚子ちゃんが眠ってしまいましたよ」などと報告にくる。「結構じゃないの」とこちらは言うのだが、栄ちゃんは何となくおろおろして仕事に手がつかない。

渡米も近くなったある日、栄ちゃんが僚子にこう言っているのを耳にした。

「僚子ちゃん、栄ちゃんは淋しいわ。僚子ちゃんがアメリカへ行ってしまったら、栄ちゃんは毎日毎日泣いてしまうわ」

「ダイジョーブ（大丈夫）よ。エイちゃんもツレテッテって、パパやママにたのむモノ」

栄ちゃんとの別れなどあり得ないとでもいうしっかりした口調で、僚子は慰めていた。

娘が就寝してから、栄ちゃんにたのんだ。

「あなたが不幸になると思ったら、僚子はアメリカへ行ってからも淋しがると思うの。だから、アメリカ行きのことは知らん顔していてね」

「はい、わかりました」

とうなずきながら、栄ちゃんは涙ぐんだ。

昭和四十年十一月二日の朝のことだった。かわいがっていたリスに最後の餌をやった娘を車に乗せて、私たちは横浜へ向かった。四歳半になっていた彼女は、埠頭に横づけになった「あるぜんちな丸」の巨体に歓声をあげた。

荷物検査と乗船手続きがすむと、見送り客の乗船が許され、サロンは賑やかになった。造花のレイを誰かにかけてもらった僚子は、大得意で見送り客のあいだを縫って走り回っていた。栄ちゃんがそのあとを追っていく。黒いドレスにネックレース、帽子にハイヒールと、栄ちゃんはせっかくおしゃれをしてきたのだけれど、ゆうべ泣いたらしい眼は腫れぼったく、沈みきった表情をしている。

「これ、ホントになげてもいいノ？」

人ごみをわけて近づいてきた僚子が聞いた。見ると、五色のテープの束を重そうにぶら下げている。あとで船の上から投げるのよ、とわたされたのであろう。そんないたずらを本当にしてもいいのだろうか、と疑っているらしい。

「あとでママも一しょに投げるわね」

と言うと、真剣な表情のまま走り去った。

四時半、見送り客の下船をうながすドラが鳴り響いた。友人や親戚たちはぞろぞろサロンを出て行った。栄ちゃんは最後まで僚子の後ろに立っていた。眼が合うと、何か声をかけようと戸惑っていた私に軽く目礼して、栄ちゃんはくるりと後ろをむき、サロンを出ようとした。いつもの癖で、僚子も

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com